



人工知能（AI）革命は、歴史上の印刷革命や産業革命とは異質なものだ。過去の二大革命は、科学的発見や民主主義の創意工夫がいかに、宗教戦争や全体主義といった情報ネットワークの悪用をもたらした。人類はAI革命によって、過去の教訓や歴史の実験を踏まえて過ちと試練を克服できるのだろうか。

著者の答えはあまり楽観的とはいえない。AIは、自ら決定を下しながら新しい考えを生み出す最初のテクノロジードであり、独自の行為主体性を持つからだ。AIは人間の思考と違う

NEXUS (上・下)

ユヴァル・ノア・ハラリ著



(柴田裕之訳、河出書房新社・各2200円)

▼著者は76年生まれ。イスラエルの歴史学者・哲学者。著書に『サピエンス全史』『ホモ・デウス』など。

AIが生む民主主義の危機

み、何百万人もの支持者を獲得した。その活動家は21年の米国議会議事堂襲撃にも重要な役割を果たし、カナダのトルドー首相宅を襲う計画やフランス政府転覆の陰謀が発覚したばかりではない。20年の米国連邦選挙では24人の候補者がQアノンの支持者だと告白した。その一人は、トランプ氏こそ陰謀団を排除できる人物だと礼賛したのだ。

AIの開発は国威を賭けた競争となっているが、先見性のある民間起業家のおかげで米国が首位を走っているようだ。勝者が獲得する景品は「世界制覇」であり、トランプがシンガポールの半導体大手ブロードコムによる米クアルコムの買収を阻止

したのも、中国の影を感じたらだろう。他方、情報テクノロジーの未来はもはやバラ色だけとはいえない。AIの力で人間の対立が激化し、AIの軍拡競争は人類の破滅につながるかねない。それは、AIに「全体主義的な潜在能力」も隠されているからだ。

重要なのは我々が歴史をいかに理解するかである。著者によれば、国や国民の利益は数学や物理学の方程式からは導かれない。AIの支配的幻想に沈まないためには、強力な自己修正システムを持つ民主主義の制度を構築する困難な仕事に取り組む

ほかない。著者の一見平凡そうなる結論に私も深く同意したい。《評》富士通フューチャースタ

ディーズ・センター特別顧問

山内 昌之

決定を下し、特異な考えを生み出す以上、民主制の存続や富の公正な分配にまつたく思いがけない判断を示すかもしれない。著者は、Qアノンとして知られる陰謀論を引き合いに出す。

2017年に或る掲示板サイトに現れたQドロップなるオンラインメッセージは、米国はじめ各国政府内部に「魔王を崇拜する小児性愛者」らが潜入しているという過激な世界観を売り込